
春風と共に

邊川 弘

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春風と共に

【Nコード】

N0401N

【作者名】

邊川 弘

【あらすじ】

日常の中で訪れる小さな胸の高鳴り。

だが、周囲の目はその小さな鼓動を止めてしまう。

青い恋心と幼い自尊心にゆれる少女と笑顔が素敵な男の子との物語。

何気ない小学校での会話。

昼休みの男女のからかいあい。

「あれ？徹もしかしてお前神野のこと好きなんじゃねーの？」

否定すれば終わるそんな何気ない会話。

でも彼は否定しなかった。

「え、僕は好きだよ。神野さんのこと」

にへつと笑う。

彼の魅力。特にカッコイイわけでもない。運動も人並み。勉強だつて中の下。

ちよっぴり背は小さいけど。

笑顔が……まぶしかった。

私は嫌いじゃない。いいえ、好きだった。

だから彼のその言葉はともうれしかった。

でもね、だめなの。

みんなが見てる。

そう、私の答えを待ってる。

だめなの、みんなが見てるから。

ここで私が本当の気持ちの口にしたら笑われてしまうの。

だから……こんなセリフが出てしまう。

「ちよつと、やめてくれる？きもちわるいよチビ」

「ええ？でも嫌われるよりか好かれてる方がいいよね」

「いや、嫌ってくれたほうがうれしいですう」

「あれ、そうなの」

笑顔が少し……崩れる。

「ほんとほんと！まじキモイ！」

「あんたみたいなチビ輔に好かれるくらいなら嫌われたほうがまし
い！」

「あつちいつてくれる!？」

本当に女の子ってこういうのが好きだ。

一人が言い出したらもうとまらない。

これがまた深く根付くから厄介だ。

「うわ、徹マジありえねーわお前。あんなデカ女が好みなのかよ!」
デカ女。

女子の成長期は割と早い。

小学生で一気に伸びる子もいる。わたしもその類だ。

だから私と彼とではすごい身長差になる。

二人で並ぶと姉と弟みたいに見られそうで恥ずかしい。

こんな要因も関係していたのかもしれない。

このときの私は少し変だった。

「ごめんね神野さん。君がそれを望むなら。なるべく嫌いになれるように努力するよ」

「てかさ、私の視界に入らないでくれる? まじ邪魔なんだけど」

「はは、ごめんね」

彼の笑顔はもう乾いていた。

もう、戻れない。

この日から彼へのいじめがはじまった。

あの一件を境に彼にはキモイというレッテルが貼られることとなった。

男子からはからかわれ。

女子からは陰湿な嫌がらせを受けていた。

日直の当番を押し付けられたり。

内履きを隠されたり。

ランドセルをカッターナイフで切り裂かれていたり。

私の知らないところではもっとひどいことをされていたかもしれない。

でも、彼は……笑ってるの。

あのころの笑顔とは違う無機質な笑い。
顔だけ笑ってる。

そんな感じ。

だから、なおさらいじめられた。

「なに笑ってんだよ！」

「気持ち悪いからコツチ見ないでくれる？」

ここまでくると原因なんて関係ない。

自分達より弱いものを見下す。

集団というものにはどうしてもこっという面がある。

彼はその位置におさまっていた。

だから、私がいじめなくても誰かがいじめる。

ある日、私は教室に忘れ物をした。

夕焼けの学校。

橙色に染め上げられた廊下を抜け私は教室に向かう。

「・・・つく。うえつく」

誰かが泣いてる。

否、私は分かっている。

彼だ。

彼は落書きだらけの体操服を握り締めて泣いてた。

いつも笑ってるのに。

今日は泣いてた。

辛いはずがない。

笑っていられるはずがない。

だから彼は人知れず放課後の教室で泣くんだ。

「……天原」

ビクッ！

彼は落書きだらけの体操服で涙を拭くと必死に笑顔を貼り付ける。

「な、なんだ。神野さん。みてたの？」

「……あの」

「はは、コレ油性だからね。明日までにとれるかなあ？母さんには
れないようにしないと。へへへ」

そのとき、数人の女子達が教室に歩いてくる。

「あれ？神野っち。どしたの？わすれもの？」

「やだ！チビいるじゃん！」

「うぜえよ。さっさと帰れよ」

彼は体操服をランドセルに押し込むと逃げるように教室を出る。

「ごめんね、また視界に入っちゃったね。なるべく入らないように
してるんだけどな」

「今度からは気をつけてね」

「わかったよ」

本当に素直じゃない。

私って……最悪だ。

そんな日々は8ヶ月も続いた。

そう、今日は卒業式。

結局、あれ以来彼とは一言も話していない。

彼に対するいじめはもちろん継続。

私は、それを視界の片隅に捉えながらも見て見ぬ振りを続けた。

だって見ていられないから。

だけど私にはそれを止めることもできない。

だから見ないようにしてた。

きつと彼は私を恨んでるだろうな。

でも、もう終わる。

だって今日で卒業だもの。

コレで彼は解放される。

私はこう思うことで罪悪感から開放されただけなのかもしれない。

彼がもう誰にもいじめられない。

このことがうれしいのは本当。

よかったね、天原。

そしてごめんね。

「遅かったね」

桜並木の中、彼が立っていた。
にへっ。

あの時の笑顔をうかべて。

「…………天原。……な、なに？お礼参り？通学路で待ち伏せとは恐れ入ったわよ」

「僕ね。アレから神野さんの事嫌いになれるように努力したんだ」

「へ」

「神野さんが言ったから、嫌いになってほしいって」

「あんた」

「イジメられてるときも、これは神野さんのせいだって言い聞かせた。でもさ、やっぱりだめだった」

「……………」

「やっぱりさ。僕、神野さんの事好きみたいだから。嫌いになんてなれなかったよ」

トクンツ。

まただ、この笑顔。

どうして笑えるの。こんな私をまだ好きだといってくれるの？
わからない。

理解不能。

「神野さんさ、いつも悲しそうな目をしてたから」

「え？」

「みんな僕をいじめるときは笑ってるんだよ目が。でも神野さんだけがさ悲しそうな目をしてたんだよ」

「はんっ！どうしてそんな事がいえるの？言つてて恥ずかしくない？」

「恥ずかしくない。ここには僕と神野さんだけだよ」

確かにここは人通りの少ない道だ。

通学路とはいえこの方面から歩いてくる生徒は少ない。

「ここには他人の目はないんだ」

みんな見てない。

だから恥ずかしくないんだ。

「だから、もう一度だけいいかな」

「なにが」

「僕は神野さんのことが好きだよ」

笑う。

この人は…………。

本当に…………バカだ。

私は彼の胸に飛び込む。

胸に飛び込むと言っても彼のほうが身長が小さいから私は立てひざで彼にすがり付いてる様な情けない格好だ。

だけど、涙は止まらない。

溢れる想いは頬を伝い彼の制服を濡らす。

「天原なんて大っきらい！！ほんとうにバカで！お人よしで！」

「ごめんね。不器用なんだ僕」

そつと頭をなでてくれる彼の小さな手は大きくて暖かく感じられる。

「神野さんだって本当は優しくてお人よしでしょ？ただみんなの目があったからこうなってしまったんだよね。僕がもう少し気配りができたら、神野さんをこんなに傷つけることもなかったのにね」

「どうして！どうして私を責めないの！いつそ責めてくれたほうが！」

「責めなくていいからだよ。神野さんの言動はあの場面では仕方な

かったかもしれない」

「そんなことない。もつと言い方があつたはず！なのに……」

「僕は気にしないよ。ただ一つだけいいかな」

「なに？」

「これからは君を好きでいていいのかな？」

ざあああ

花の香りのする暖かい風が彼の柔らかい髪を躍らせる。

彼は笑っている。

だから私も……。

服の袖でぐいっつと涙を拭い、笑顔で答える。

「……当たり前でしょ。本当に……バカなんだから」

私達はこの春風に乗ってどこまでもいける。

恋物語はここからはじまるのだから。

END

（後書き）

大分まえに書いたものですが登録記念に投下。
これから少しずつ書いていけたらいいなと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401n/>

春風と共に

2010年12月29日20時12分発行